

特別支援に基づいた校内別室を起点とするチームでの支援

不登校生徒の状況

対象生徒の不登校は、小学校から継続していた。中学校入学後は通常どおり登校していたが、2学期に入り欠席しがちになり、中学校1年生の半ばには不登校となった。中学校2年生に進級した当初は、怖くて職員室に近付けず担任を呼べない状態だった。

具体的な取組

○不安や焦りを語れる場づくり

ウォームアップでカードゲームやボードゲームを行い、仲良くなったところで、不登校対応巡回教員がファシリテーターとなり、互いに不安や焦りを語り合い、共感し合えるようにした。

こだわりや緊張をほぐすような関わりを意識し、自己理解を深め多角的な角度からものを見られるようになる対話やゲームを継続的に行った。

○緩やかな居場所づくり

校内別室のみならず、校内の職員室、事務室、図書室、通級等に出向き、多くの教職員と少し立ち話をする時間を意識的に設けた。

学級活動や給食などの特定の時間だけ教室で過ごしたり、行事の見学だけで登校したりできるようにしている。

○オンラインによる授業配信

教室に常時配信できるようタブレットPC等の機材を設置し、別室から教室の授業を視聴し、教室の雰囲気に触れることができる環境を整えた。



○関係機関との連携

巡回教員と特別支援コーディネーターを核に、校内委員会で教育支援センター、特別支援教室、SCと情報共有した。

家庭環境が不登校の要因となっている生徒へは、子ども家庭支援センターや児童相談所と連携し、SSWと学級担任による家庭訪問を行った。

成果

当該生徒は、少しずつ学級に入ることができるようになってきた。「先生方はなぜこれほどまでに自分を好きでいてくれるのだろう。」と不思議がりながらも喜び、抵抗感なく職員室で先生を呼ぶことができるようになった。

課題

通級教員や学級担任と協働して日常の困り感に寄り添い、よりよく生きられるように自立支援も継続しながら、進路に向けた支援を学級担任と共に継続していく。

「自分のペースで安心して登校できる居場所づくり」について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校4年生から不登校状況が続いており、中学校入学後も5月中旬から8月まで長期欠席状況にあった。不登校対応巡回教員による家庭訪問及び校内別室支援開始後の9月からは、週1日、校内別室に登校できるようになった。教職員との会話は楽しむことができるものの、同年代の友人との関わりに対して不安を感じている。

具体的な取組

○家庭訪問、電話連絡の実施

不登校巡回教員、学級担任がそれぞれ別時期に家庭訪問を行い、学校の様子を伝えたり、校内別室について紹介したりした。当該生徒だけでなく、保護者との電話連絡を毎週行うことで、家庭での状況を聞き、校内別室での様子を伝えて、双方向での情報共有を丁寧に行った。

○校内での居場所づくり

当該生徒と学級担任とで保健室へ行き、養護教諭との人間関係を築いて、困った時に頼れる場所だと確認した。カウンセリングルームや少人数教室など、在籍学級以外にも登校できる場所を用意した。



○友人との人間関係の構築

校内別室で当該生徒の好きなUVレジン工作活動を企画し、自然と会話が弾むような環境づくりを行った。また、校内別室に通う他の生徒との交流を通し、同年代の友人との会話や関わり方を学んだり、悩みを共有したりした。



○学級との関わり維持

学級の生徒に校内別室まで給食を運んでもらえるよう協力を依頼した。給食を持っていく時に自然と「ありがとう。」などの会話から友達との触れ合いが生まれている。昼休みには、学級の生徒が校内別室を訪れ、日常会話を楽しんだり、行事への参加を促したりしている。

成果

校内別室支援開始1か月後の10月初旬には、給食を運んできた生徒や、別室を訪ねてきた生徒と会話ができるようになった。11月には道徳の授業に参加の意思を示した。2月に実施する宿泊行事に参加の意思を示した。

課題

生徒の内面的な課題の認識や解決の手だてについて保護者の理解を得ること。

基礎基本の定着が不十分な学習の補完をすること。

複数の教職員との温かな関わりで前向きな姿勢を取り戻す支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、家庭環境が不安定で保護者も心身ともに疲れている様子が見られ、積極的な支援を求めることが難しい。また、学力が定着していないため、通常の学級での授業内容の理解が難しい。そのため、5月以降欠席が増え、6月にはほぼ不登校になった。

具体的な取組

○定期的な家庭連絡

定期的に家庭連絡をし、保護者に寄り添い、当該生徒の状態や要望について話し合った。学校が今後の方針を複数具体的に提案し、保護者の心が安定する支援もした。

保護者との相談の中で、校内別室を利用することを提案した。

○校内別室での環境調整と対話による支援

校内別室では、当該生徒の興味関心がある工作に取り組むなど、穏やかに過ごせるように環境を整えた。

穏やかな雰囲気の中でのコミュニケーションを通し、家庭での生活を見直し、自己肯定感を高める支援をした。



雰囲気を和らげる丸テーブルの導入

○同年代の生徒と段階的に関わりがもてる支援

校内別室に慣れてきたタイミングで、他の生徒も含めた小集団活動を通して他者との交流を楽しめるような機会の設定を増やした。

給食も校内別室の中で、少人数で喫食できるようにした。

○学年教員・通級支援員による支援

不登校対応巡回教員の不在時は、学年や通級支援員が当該生徒の状態に合わせて、個別に対応した。

学級担任が来室し、不登校対応巡回教員と共に、当該生徒と過ごす時間も設け、様々な教職員に温かく見守られていることが分かる支援を継続的に行った。

成果

校内別室の利用以降は、校内別室に週 1 日登校できるようになった。2 学期には「クラスで頑張ってみる」と言い、教室に入る日が増えてきた。固定学級の見学や体験もするようになるなど、前向きな姿勢が見られるようになった。

課題

生徒に合わせた学習支援を継続していく。固定学級への転籍も視野に入れながら、保護者からの理解を求め、連携していく。

発達の特徴を意識した校内別室の関わりについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から不登校傾向で、中学校2年生前半までは欠席しがちではあるものの登校していた。次第に朝起きられないことや、不安を訴えることが多くなり、起立性調節障害の診断を受けた。中学校3年生から不登校になり、現在は校内別室の利用をしながら通院をし、神経発達症の可能性を指摘され近く発達検査を受ける予定でいる。

具体的な取組

○校内別室利用カードを通じての交流

当該生徒は、新規場面に過度な不安感をもつため、新年度の年度当初は旧学級担任が対応し、新学級担任は校内別室利用カードを通じて徐々に当該生徒にアプローチをした。巡回教員が仲介をして新担任と本人をつなぎ、現在は新学級担任にも心を開き安心して関わる事ができている。

○校内別室においての同年代との交流

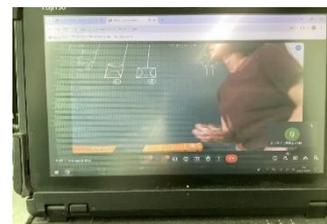
当該生徒は、同年代とのコミュニケーションを苦手としているが、校内別室において徐々に人数を増やす形でグループワークを実施した。特別支援学級での実践も取り入れるなどして、当該生徒に支援を続けた結果、コミュニケーションへの苦手意識も軽減され、継続して登校できるようになった。

○適切な情報提供と役割分担

主治医に神経発達症の可能性を指摘されたことを契機に、巡回教員、学年主任、学級担任、保護者の四者面談を実施した。また、学校内外の支援機関の情報提供をした。その後も話合いの場を定期的に設け、役割分担をした上で、特性を踏まえた支援が行きわたるようにした。

○常時視聴できるオンライン授業

学年では常時オンラインで授業を配信し、オンライン授業にいつでも気軽に参加できるようになっている。



成果

コミュニケーションや初めての人間関係や場面への苦手意識が強く、神経発達症の可能性を視野に入れてアプローチした結果、できることが増え、継続した登校につながった。保護者も含めて面談し、医療にも適切につながったことも好転した一因である。

課題

今後は、当該生徒が自己理解を深めることに課題があるため、当該生徒が自身の特性について学ぶ場を提供していく。

自分のペースで過ごせる空間づくりについて

不登校生徒の状況

対象生徒が登校できない理由としては、学習への不安感や焦燥感、学力不振、起立性調節障害、無気力、教室や集団人間関係構築が苦手、ネグレクトなどが挙げられる。また、他の不登校生徒は、市内中学校に設置された教育支援センターや通信制のフリースクールに通う場合もある。

具体的な取組

○校内別室の運営

校内別室は、毎日開設している。

利用している生徒は
中学校1年生1人
中学校2年生2人
中学校3年生1人
である。



〈巡回教員による小集団活動〉

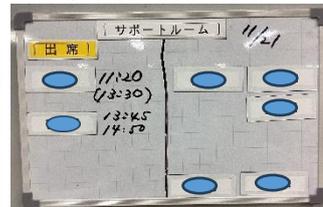
教室の管理運営は、不登校対応巡回教員と管理職が行っている。

○校内別室の利用について

- ① 担任や学年教員、SCから当該生徒・保護者へ説明する。
- ② 利用生徒は、登校したら職員室へ挨拶し、校内別室へ向かう。下校時も職員室へ挨拶する。
- ③ 過ごし方は、各自でその日の時間割を決め、自分のペースで学習する。
- ④ 学級担任や学年の教員は、職員室のホワイトボードで登校を確認し、校内別室にて質問などを受けて生徒とのコミュニケーションを図る。



〈区切られたスペース〉



〈職員室の出欠確認票〉

○不登校対応支援に関する校内研修

校内研修として、学級満足度調査についての研修や学級経営のための研修などを実施し、より良い生徒理解・学級経営につなげている。

○デジタル機器を活用した不登校生徒の支援

常時配信のオンライン授業で学習の機会を確保し、不登校生徒の実態やニーズに応じた個別学習を支援している。



成果

利用生徒は、教室で授業を受けることはできないが、別室登校できるようになった。

学級担任だけでなく、全教員で関わることで生徒の学びの可能性を広げ、学級担任の負担を軽減することにもつながられた。

課題

適切な生徒理解・生徒指導により、個別最適化された指導体制を整備する。

生徒が目的意識をもって過ごせるようにする。